

自閉症スペクトラム児の空間的視点取得スキルの指導

Training of spatial perspective-taking skills in a child with Autism Spectrum Disorder

○朝岡寛史¹・岡村章司²・渡部匡隆³(筑波大学大学院人間総合科学研究科)⁽¹⁾(兵庫教育大学学校教育研究科)⁽²⁾(横浜国立大学教育人間科学部)

Hiroshi ASAOKA, Shoji OKAMURA, Masataka WATANABE

(Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba) (Graduate School of Education, Hyogo University of Teacher Education) (Faculty of Education and Human Sciences, Yokohama National University)

Keywords: spatial perspective-taking skills, Autism spectrum disorder

I. 問題と目的

自閉症スペクトラム (以下, ASD) において、関係性を表す言語や概念の理解の困難さが指摘されている (Twachman, 1995)。空間的な概念の理解に関して、自分とは異なる空間的位置に視点を移動させ、そこからのみえ (view) を思い描く心の働きは、空間的視点取得として扱われる (渡部, 2006)。視点取得を促進するアプローチとして、他者視点位置からのみえを観察する手続きの有効性が実証されてきた (e.g., 朝岡・渡部・岡村, 2010)。本研究では、他者視点位置に移動してみえを観察する再認プロンプト手続き (奥田・井上, 2002) の効果が得られない ASD 児1名を対象に、付加的な介入の効果を検討することを目的とした。

II. 方法

対象児 医療機関にて自閉性障害と診断された小学校6年生の男児1名 (以下, A児) を対象とした。研究開始前に実施した WISC-IV の結果は、FSIQ78、VCI82、PRI82、WMI68、PSI96であった。また、ITPA 言語学習能力診断検査による言語学習年齢は6歳3ヶ月であった。自己視点からの左右の弁別は確立されていたが、前後の弁別は可能であった。

期間および場面 X年11月～X+1年5月の7か月間に、B大学のプレイルームにおいて原則週1回のセッションを行った。1時間の個別指導の時間のうち、約15分間を本研究の実施にあてた。

セッティング A児とMTが机を挟み、向かい合って着席した。机上にミニカー等の対象物と、それを前後から撮影した写真カードを2枚提示した。いずれの対象物も左右対称、前後非対称であった。なお、介入2期ではST1名が加わった。A児とST1名が向かい合って着席し、MTは机のそばに座った。

手続き (1) ベースライン (以下, BL): 「A君から見ると、この中のどれが前／後に見える？」と質問した (以下, 自己視点質問)。または「先生 (MT) から見ると、この中のどれが前／後に見える？」と質問した (以下, 他者視点質問)。その際、適切な写真カードを指差しすることを正反応と定義した。写真カードを選択後、「よく頑張っているね」等と取り組みに対してフィードバックし、次の試行に進んだ。(2) 介入1-1期: 正反応が生じた場合は、言語賞賛や拍手によって強化刺激を提示した。誤反応が生じた場合には、再認プロンプト手続きを実施した。最初に「ブブー」等と言語的にフィードバックし、A児をMTの視点位置まで移動させ、対象物に注目させた。そして、A児を元の場所に戻して再度質問した。(3) 介入1-2期: 介入1-1期の手続きに加えて、質問する前に「△△ (対象物) はどちらを向いている？」、「先生はどこにいる？」と対象物とMTの位置を確認した。(4) 介入2期: 自己視点質問のときには、MTが「(A児からST方向に指差ししな

がら) こっちから見ると」というモデルを提示した。また、他者視点質問のときには「(STからA児方向に指差ししながら) そっちから見ると」とモデルを示した。A児が適切に実行できた場合は即時に言語賞賛し、適切に実行できない場合には言語や指差しによってプロンプトした。(5) プローブ: BLと同様の手続きで行った。(6) 維持プローブ: 介入2期終了から約2か月後に実施した。

III. 結果と考察

Fig.1に自己・他者視点質問別に写真カード選択の正反応率の推移を示した。介入1期において、再認プロンプト手続きの実施後に再質問するとA児はすべての試行で適切な写真カードを選択したが、正反応率はチャンスレベルを推移した。介入2期の手続きにより、他者視点質問の正反応率が上昇した。しかし、維持プローブにおいて指導効果は維持されなかった。

本研究の結果から、介入1期に実施した再認プロンプト手続きにより、A児は誤反応時にもう一方の写真カードを選択することを学習した可能性が考えられる。他者視点質問の正反応がチャンスレベルに留まったことに加え、自発的に他者視点方向に移動したり、頭を傾けたりする等の行動が出現しなかったことからその可能性が示唆される。介入2期において、「こっち／そっちから見ると」と表出したり、方向性を指差ししたりすることで、質問文におけるA君／先生と前／後、対象物のみえが機能し、弁別が促進したと考えられる。また、A児はTの名前を覚えること等が苦手であったことや日常生活でスキルを使用する機会がなかったために指導効果が維持されなかったと推察される。今後の課題として、方略を保持するための手続きの検討が求められる。加えて、本研究から得られた示唆をもとに再認プロンプト手続きが機能するための前提条件について検討する必要がある。

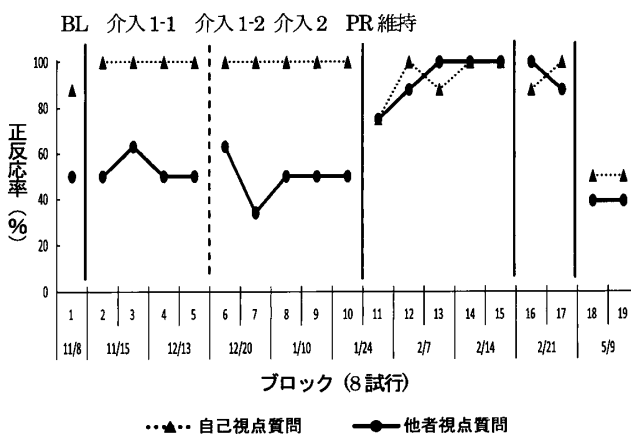


Fig.1 視点別の写真カード選択の正反応率の推移